

広報委員 の一言

秋の深まりとともにクマによる深刻な被害が連日のように報道されていますが、会員の皆様のなかに、クマに遭遇したことのある方はおられるでしょうか。私自身は3年ほど前、仕事帰りに車のライトの先から黒い物体がこちらに向かってどんどん近くなり、クマだとわかった瞬間、向こうが90度向きを変えて土手を駆け上がって行って事なきを得たということがありました。かなりびっくりしましたが、さらに今年11月には自宅の庭の柿の木にクマが出ました。幹に爪痕がくっきり刻まれ、大きな枝さえ折れて柿の実を食べ尽くされていました。実際には見てはいないものの夜間に自宅にクマが出たことは、車内にいて道路で出会ったのとはまた違った恐ろしさがありました。

今年4月に開催された日本形成外科学会総会においては『近年増加するクマ外傷の現状を知る』というシンポジウムが開かれ、立ち見が出るほど盛況で、既に医療界でクマによる外傷は大きな注目を集めていたようです。このシンポジウムに参加した形成外科医の友人から秋田大学の中永士師明先生による『クマ外傷 クマ—ジェンシー・メデシン』という本を紹介してもらい、クマ外傷の特徴を知って改めてその深刻さを感じました。

今年のクマ被害の多さには、山のどんぐりの凶作など今年特有の原因があり、実際に駆除されたクマの胃にどんぐり類が一つもなかったとのことで、クマとしてもやむにやまれず気の毒なことです。さらに近年のクマ被害の増加傾向には気候の温暖化、人口減少、高齢化、里山の荒廃等々、現

代日本の抱える諸問題が背景にある以上、問題の解決は容易ではないものと思われます。

一方で、1991年版環境庁編『日本の絶滅の恐れのある野生生物 レッドデータブック』には、これまでのやり方を今後も続けていけばという前提付きではあるものの日本の広汎な地域でヒグマとツキノワグマの衰退・絶滅が予測されており、実際に2012年環境省が九州のツキノワグマの絶滅を宣言しています。近代化のなかで餌を求めて人里に出没し、木材に害を与えるクマを害獣とみなして根絶を目指す春グマ駆除などが行われた結果クマの生息数は確実に減って、遂には絶滅が心配されるに至ったものの、自然破壊への反省などから潮目が変わり、個体数が増加に転じて現在は増えすぎてしまったとの専門家の指摘があります。このようにクマの個体数は人間側の都合で大きく増減し、適正数を維持するのは至難の業と言えます。

さらに市街地に現れ人間を恐れないアーバンベアの増加や一歩進んで人間を獲物とみなす異質なクマの存在、動物愛護の声の高まりなど、単に数が増えただけにとどまらない質の変化を指摘する専門家もいるなかで、人間とクマの共生はますます難しくなっているのかもしれません。

医療者としてはこれからも人の行動に影響を及ぼすクマ事情から目が離せないところです。加えて自宅にクマが出た身としては、せめて冬になったらクマにはしっかり冬眠してほしいと願うばかりです。

(高野 由美子 記)

広報委員会委員：佐藤雄一郎・橋立英樹・勝井豊・高塚尚和・磯部賢論・高野由美子・恩田晃・平塚素子・永井雅昭

新潟県医師会報・第909号〔令和7年12月〕

発行所 〒951-8581 新潟市中央区医学町通2-13 新潟県医師会

TEL：025-223-6381 FAX：025-224-6103

ホームページ：http://www.niigata.med.or.jp メール：kaihou@niigata.med.or.jp

印刷所 〒950-8724 新潟市中央区和合町2-4-18 株式会社 DI Palette
